

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国人留学生における日本留学の現状に関する一考察
Author(s)	趙, 碩; 周, 正; 藺, 鵬; 費, 曉東
Citation	学習開発学研究 , 13 : 117 - 124
Issue Date	2021-03-30
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50813">10.15027/50813</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050813">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050813</a>
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



# 中国人留学生における日本留学の現状に関する一考察

趙 碩<sup>1</sup>・周 正<sup>2</sup>・蔭 鵬<sup>3</sup>・費 曉東<sup>4</sup>

(2020年11月30日受理)

## A Study on the Life of Chinese International Students in Japan

Shuo ZHAO, Zheng ZHOU, Peng LIN and Xiaodong FEI

**Abstract:** Chinese students, as the largest number of students studying in Japan, accounted for one-third of the number of international students in Japan in 2019. Led by Chinese students and with Japan's "300000 students Program" and the internationalization of universities, the number of overseas students in Japan, will also be increased. The study on the problems faced in the life of studying abroad can provide a theoretical basis for the better formulation of supports of studying abroad. So far, the study on the influencing factors of studying abroad life is not enough, and the relationship between those factors has not been mentioned. Based on the data obtained from Fei (2017) questionnaire, applied by SPSS statistical analysis software, this study analyzes ten factors, such as motivation, psychology, daily life, academic research, intercultural adaptation, and discuss the relationship between the various influencing factors. The conclusions have strong practical significance for the further understanding of the current situation of Chinese students studying in Japan, providing more effective supports, and improving the satisfaction of studying abroad.

**Key words:** Chinese International Students, Study Abroad Life, Academic Research, Intercultural Adaptation, Study Abroad Support

**キーワード:** 中国人留学生, 留学生活, 学術研究, 異文化適応, 留学支援

## 問題と目的

独立行政法人日本学生支援機構 2019 年度の調査データによると、日本国内の外国人留学生数は 298,980 人となっており、その中、中国人留学生が 114,950 人であり、最も多いことが分かった。2020 年を達成の目処としている日本政府の「留学生 30 万人計画」が進む中、また各大学の国際化が加速する中、今後中国人留学生をはじめ、外国人留学生が増えることが予想される。

また中華人民共和国教育部 2015 年度の統計データによると、中国人留学生を選ぶ博士課程の留学先は日本が第 2 位であ

<sup>1</sup> 中国江蘇大学教師教育学院

<sup>2</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

<sup>3</sup> 中国濰坊科技学院

<sup>4</sup> 中国北京外国語大学北京日本学研究中心

り、大学と修士課程の留学先は日本が第6位であることが分かった。日本は中国人留学生を選ぶ人気な留学先の1つであることが窺える。

そこで、本研究では、日本で生活している中国人留学生の留學生活の現状を調べ、安心かつ安全な留學生活、そして実りのある留學生活を送ることができるよう、有益な示唆を与えることを目指す。具体的には、広島大学に留學している中国人留学生を対象にアンケート調査をし、留學生活に直面する問題点を分析する。

中国人留学生における日本留學の問題点について、経済面の負担が大きいことや異文化コミュニケーションが難しいことなどがよく指摘されている。徐・蔭山(1994)は、中国人留学生を対象に、日本での留學生活についてアンケート調査を行った。その結果、経済面のストレスと日本人学生との交流が少ないことが、主な問題点として報告された。経済面の問題を解決するために、留学生がアルバイトの数を増やしたり、勤務時間を延長したりする措置を取り、学習と研究に負の影響を与えてしまうことが指摘された。また、日本人学生とのコミュニケーションや留学生どうしの交流が少ないせいで、留学生の精神状態が不安定となり、憂鬱などの心の病になってしまう危険性が高いことが指摘された。これらの問題は、中国人留学生の日本での留學生活に大きく影響することが分かった。

日本人学生とのコミュニケーションが少ない主な原因は、異文化適応がうまくできないことにあると考えられる。毛(2013)は、中国人留学生を対象に、日本での異文化適応についてアンケート調査を行った。その結果、日本人の婉曲な表現の仕方との衝突、留学生による自己中心で周りへの配慮の欠如、日本社会の様々なルールへの認識不足、他人のプライベートへの侵害の4点が報告された。異文化適応がうまくできるか否かは、留学生の日本留學生生活の達成感を大きく左右することになると考えられる。

今までの研究で明らかにされた一連の問題点はどのように解決できるのか、これらの問題点を解決することによって日本での留學生活とどのようにつながるのか、などの課題についてだんだん注目されるようになった。陳・高田(2008)は、中国人留学生を対象に、日本留學生生活における社会支援のあり方についてアンケート調査を行った。その結果、70%以上の留学生が、何らかの形式で社会支援を受けていることが分かった。その中、学術研究に関する支援が一番多く、精神面の支援も多いことが報告された。社会支援の形式は、留学生どうしによる支援や、日本人学生や友だちからの支援などが挙げられた。社会支援の多さと留學生生活のストレスの程度の間には、強い負の相関があることが明らかになった。様々な社会支援が、留学生の留學生生活に積極的な影響を与えることが明らかとなった。

周・深田(2011)は、中国人留学生を対象に、留学生の精神面のストレス及び社会支援の効果について、1993年の調査データと2010年の調査データを比較し分析した。17年間の変化を分析した結果、留學生生活に関わる日常生活と異文化適応に関する影響要素が増えたが、学習・研究に関する影響要素が減る傾向が示された。また、精神面や日常生活への社会支援が増えたが、学習・研究への社会支援はあまり変化が見られなかった。これらの分析結果は、陳・高田(2008)の調査結果と一致し、ある側面による留學生生活への影響要素が減ったものの、留学生の精神面に関する問題が依然と厳しいことを示している。

中国人留学生を対象とする留學生生活に関する調査研究は、主に学習・研究生活や異文化適応に着目し、日本留學の現状と問題点を指摘した。また、これらの問題点を受けて留學生生活と社会支援との関連を調べ、解決策を模索した。先行研究の結果を踏まえ、2つの検討すべき点が浮かび上がる。

1 点目は、留學生生活に関するより多くの側面や各側面の関連性を調査することである。先行研究では、主に研究生活と異文化理解が検討されたが、そのほかの側面についてあまり議論されていない。徐・蔭山(1994)が指摘した経済面のことははじめ、日本留學に関する様々な側面において、現在どのような問題があるかを詳しく調べる必要がある。

2 点目は、留学生がどのような社会支援を求められているかを調べることである。先行研究では、留學生生活と社会支援との関連を調べたが、留学生が具体的にどのような支援を求めているか、研究と異文化理解のほかに、またどの側面に支援を提供する必要があるか、などのことがまだ明らかにされていない。

以上を踏まえ、本研究では、中国人留学生がより良い日本での留學生生活を送ることができるため、更なる調査を行い、留学生のキャリア設計に有益な示唆の提示を試みる。日本全国の研究調査に先立ち、まず広島大学の中国人留学生を対象に、日本での留學生生活の現状を詳しく調べ、生活実態や留學生生活に直面する様々な問題点を分析する。具体的には、日本留學の

動機・目的、経済面、心理面、学習・研究、異文化適応、自然災害、社会支援などの幅広い側面においてアンケート調査を行い、これらの影響要素が日本での留学生活との関係を明らかにすることを目的とする。

本研究の調査を通して、留学生生活をより充実させるには何が必要か、示唆を得ることを目指し、今後の全国調査の実施に示唆を提供する。本研究の調査結果は、従来の調査結果と比較し、留学生が直面する問題の変容を明らかにすることができる。本研究の分析結果により、現在の留学生の生活状況に応える社会支援や、留学支援政策のあり方を検討する一助になると考えられる。また、現代社会における喫緊の課題である留学生鬱病の防止にも役立つと考えられる。

## 調査概要

### 1. 調査手続きと調査協力者

広島大学に在籍する中国人留学生 150 名を対象とし、2017 年 1 月にアンケート調査を行った。留学の年数や専攻のバランスを考慮し、調査票は筆者より直接あるいは知人を経由して調査協力者に配布された。有効回答数 119 部を分析の対象とした。

### 2. 調査内容

本研究では、費（2017）の調査用紙を用いた。費（2017）では、中国人日本語学習者を対象とする日本留学の調査用紙を作成するために以下の手順が取られた。まず、先行研究で扱った留学生調査に関する視点を踏まえ、調査用紙の枠組みを定めた。次に、日本留学中の中国人学習者を対象に半構造化インタビューを行い、留学生の留学現状を分析した。さらに、留学前の準備に関する内容、留学期間の学習・生活状況、留学終了後の進路・就職状況などを含め、各枠組みに関する具体的な質問項目をあぶりだした。具体的には、調査内容は大きく 12 のブロックに分かれており、詳細は以下の通りである。

①**基本属性** 性別・年齢、結婚状況、そして在籍段階・専攻分野などの項目を設定した。

②**留学の動機** 留学の目的（「日本語の能力を高めたい」「理想の仕事を見つける」などの項目で構成される）や、留学ルート（「出身大学や大学教員からの紹介」「友人・知人からの紹介」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

③**日常生活** 日常生活状況（「日本の飲食に慣れにくい」「医療利便性が低い」などの項目で構成される）や、経済的ストレス（「奨学金の申請が難しい」「学費・生活費に経済的ストレスがある」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

④**心理面** 人間関係（「日本人との人間関係にストレスがある」「中国人との人間関係にストレスがある」などの項目で構成される）や、精神的ストレス（「孤独に感じる」「専門的なカウンセリングを受ける必要がある」などの項目で構成される）などの 12 項目を設定した。

⑤**学習・研究状況** 学業（「ゼミ発表を準備することが辛い」「卒業論文などの学術研究にストレスがある」などの項目で構成される）や、学術研究（「指導教員から自分の学術研究に良いアドバイスをもらえる」「いつも先輩から研究指導を受ける」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

⑥**異文化適応** 日本の社会的・文化的適応（「日中文化と衝突したときに対応できる」「日本社会に溶け込むことができる」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

⑦**自然災害** 地震、台風などの災害に対する意識（「巨大地震の発生を懸念する」「津波災害を懸念する」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

⑧**留学支援** 日中両国の留学支援関連機関への関心度と利用状況（「中国駐日大使館、領事館による支援を利用する」「日本政府による支援を理解する」などの項目で構成される）などの 10 項目を設定した。

⑨**留学終了後の計画** 卒業後の進路希望（「卒業後、日本で就職する」「卒業後、帰国する」などの項目で構成される）や、就職意向状況（「日本国内の就職動向に常に注目する」「中国国内の就職動向に常に注目する」などの項目で構成される）などの 8 項目を設定した。

⑩**日本語能力** 調査協力者の日本語能力について 1 点から 10 点満点で評定させた。

⑪**留学生活への満足度** 調査協力者の留学生活への満足度について 1 点から 10 点満点で評定させた。

⑫自由記述 日本での留学生活の感想とこれからの日本留学の希望者へのアドバイスの2つの質問項目を設定した。

なお、②-⑨の質問項目について自分の実際の状況に当てはまる程度を、「全く当てはまらない」(1点)から「完全に当てはまる」(6点)までの六件法で回答を求めた。

### 3. データ分析

まず、調査協力者の基本属性や、留学生活の実態を分析した。次に、統計分析ツール SPSS を用いて、調査協力者の各調査内容の平均値 ( $M$ ) 及び標準偏差 ( $SD$ )、また各要素の相関関係を分析した。最後に、重回帰分析を行い、日本での留学生活に対する各要素の貢献度を分析した。

## 結果と考察

### 1. 調査協力者の基本属性

調査協力者の基本属性について、まず、性別の構成をみると、女性は79人(66.4%)であり、男性の数を上回っていた。本研究のサンプルの数の制限があるものの、この結果は、徐・蔭山(1994)の調査結果とは逆の結果であった。留学生の男女比率は20年前と比べてすでに変化しており、留学している女性の数は増加する傾向にあることが推測される。次に、年齢構成は、「20-29歳」が105人(88.2%)で全体の約9割となっており、留学生の主体は「20-29歳」の若い集団であると推測できる。徐・蔭山(1994)の調査結果によると、当時日本に留学していた中国人留学生の主な年齢層は「30-39歳」であった。留学生全体の年齢層も20年前と比べて大きく変化しており、多数の学生は大学卒業後に留学することを選択し、留学年齢層が低くなりつつあることが示された。

調査協力者の結婚状態をみると、「未婚」と回答した者が109人(91.6%)、この数字は徐・蔭山(1994)の調査結果の数字をはるかに超えた。これは、上述した留学生全体の年齢層が低いという結果と一致するものであった。また、全体の約9割(89.9%)の留学生が「私費」であり、国費留学生と私費留学生の比率が大きく変化したことが分かった。この結果は、上述した女性の留学生の人数が増えたことにもつながると考えられよう。中国の留学支援政策が次々と導入されることによって私費留学の環境が改善され、より多くの留学機会が生まれることが推察できよう。

さらに、在籍段階のなかで第一位を占めているのは、「大学院博士課程前期」62.2%(74人)であった。大学院博士課程前期や、大学院レベルの研究生の割合から、修士号の取得を目指している留学生の数が、大きく伸びていることが推測される。その他、交換留学生の割合(7.6%)から日中両国の学校間の国際協力関係がますます強まり、中国学生の日本留学のために新たな留学機会が生まれることが窺える。

以上の結果を踏まえ、中国人留学生の基本属性は全体的に変化し続けていることが窺える。これらの一連の変化は、留学生の日本での留学生活の実態とどのように関連するのだろうか。以下では、調査結果により留学生活の実態について詳しく分析する。

### 2. 中国人留学生による留学生活の実態

本節では、中国人留学生による留学生活の実態を浮き彫りしたい。紙幅の都合上、調査結果をすべて示すことができないため、留学生活の実態についての項目の中で、「当てはまる」の割合が高かった回答を取り上げて分析する。これらの検討を通じて、留学生活の実態の特徴を読み取れる。

日本留学の動機について、「理想の仕事を見つける」の項目に対して、当てはまると回答した者が104人(87.4%)で最も多く、「日本文化への理解を深める」が102人(85.7%)、「日本語の能力を高めたい」が98人(82.4%)と続き、いずれも全体の8割以上を超えていることが分かった。また、日本留学の理由について、当てはまると回答した割合の多い順に、「興味ある専攻分野があるため」が96人(80.7%)、「他の国より留学費用が低いため」が87人(73.1%)、「学位を取得するため」が80人(67.2%)であった。これらの結果から、留学の主な目的は、将来の就職の準備、日本に対する理解の増進、日本語能力の向上が主流であり、専攻分野、留学費用や学位取得が日本を留学先として選んだ重要な要素であることが推察できる。留学ルートに関する質問の回答をみると、上位3つは「出身大学や大学教員からの紹介」(50人)、「インターネットを利用し

て日本の大学の HP を検索すること」(43 人)、「友人・知人からの紹介」(30 人)であった。紹介によって日本の大学を選んだ学生が多く、これが留学生にとって最も信頼できる留学ルートであろう。また、インターネット上で公開されている大学の情報も重要な留学ルートのひとつであることが示されている。

日常生活について、全体的に言えば、「実際の留學生生活と来日前の想像とのずれが大きいと思う」に対して、当てはまると回答した者は、5 割以上 (53.8%) の 64 人であった。そのため、留學生は留学前にできる限り全面的に留学計画を立てる必要があることが考えられる。また、「飲食事情」や、「医療利便性」など日常生活状況に関する結果から、全体の 6 割以上の留學生は日常生活状況が良好であることが明らかとなった。一方、経済面を肯定的に評価する回答は多くなかった。「奨学金の申請が難しい」、「学費・生活費に経済的ストレスがある」、「授業料免除の申請が難しい」という 3 つの項目について、当てはまると回答した者はそれぞれ 89 人 (74.8%)、69 人 (58.0%)、66 人 (55.5%) であった。留學生の生活上のストレスは主に奨学金、学費、生活費などの経済的ストレスから生じていることが窺える。この結果も、上述した私費留學生の数が増加したことにつながると考えられよう。

心理面からみると、留學生は大きな問題を抱えているといえる。まず、人間関係について、「日本人との人間関係にストレスがある」と考えている者は 46 人 (38.7%)、「中国人との人間関係にストレスがある」と考えている者は 11 人 (9.2%) であった。このことは、「中国人の友人を多数持っている」が 95 人 (79.8%)、「日本人の友人を多数持っている」が 32 人 (26.9%) といった結果と一致している。留學生の主な交友対象は自国の留學生で、日本人との人間関係の希薄化が見られる。精神面に対する留學生の評価を重視しなければならない。精神的ストレスについて、「常にホームシックになる」と考えている者は 53 人 (44.5%)、「孤独を感じる」と考えている者は 62 人 (52.1%) であった。また、57 人 (47.9%) の留學生は「精神的ストレスや不安がある」と答えており、さらには 19 人 (16.0%) の留學生は「専門的なカウンセリングを受ける必要がある」と回答した。留學生に対する経済面の支援のみならず、精神面の支援の必要性も窺える。

学習・研究状況について、「指導教員から自分の学術研究に良いアドバイスもらえる」と回答した者が 95 人 (79.8%)、「いつも先輩から研究指導を受ける」が 80 人 (67.2%)、「いつも同級生間の学術交流が行われる」が 66 人 (55.5%) であった。それに対して、「卒業論文などの学術研究にストレスがある」と回答した者が 98 人 (82.4%)、「ゼミ発表を準備することが辛い」が 88 人 (73.9%) であった。多数の留學生は、研究室の研究環境に満足しているが、自分の研究状況にストレスを感じる事が分かった。さらに、「学会に積極的に参加する」が 53 人 (44.5%)、「学術論文の投稿を行う」が 30 人 (25.2%) といった結果から、留學生の学術活動は日常の授業発表や卒業論文に重点を置いており、学会への参加率はそれほど高くないことが示されている。

異文化適応について、留學生の日本社会・文化への適応が全体的に良い傾向にあることが示された。まず、当てはまると回答した者の割合が多かったのは、「日本社会が好き」(89 人、74.8%)、「日中文化と衝突したときに対応できる」(88 人、73.9%)、「日本社会に溶け込むことができる」(77 人、64.7%) といった日本社会・文化への適応であった。また「日本人と付き合いやすい」(78 人、65.5%)、「日本に長期で住みたい」(64 人、53.8%) について、当てはまると回答した者も多かった。これらの結果は、留學生自身は異文化を積極的に受け入れようとする姿勢が示されている。また、「日本人の考え方を理解する」が 88 人 (73.9%)、「日本人の仕事のやり方を理解する」が 87 人 (73.1%)、「日本人との交流活動に積極的に参加する」が 61 人 (51.3%) の項目について、当てはまるとの回答も多かった。つまり、留學生は異文化への適応方法も積極的身につけようとする事が推察できる。

自然災害に対する意識について、災害に対する危機意識が全体的に低いことが示されている。具体的な調査結果によれば、「巨大地震の発生を懸念する」の項目に当てはまると回答した者が 42 人 (35.3%)、「福島県の原子発電問題を懸念する」が 40 人 (33.6%)、「津波災害を懸念する」が 29 人 (24.4%)、「日常的に頻繁に発生する地震を懸念する」が 26 人 (21.8%)、「台風災害を懸念する」が 19 人 (16.0%)、「豪雨による災害を懸念する」が 19 人 (16.0%)、「火山災害を懸念する」が 14 人 (11.8%) となっている。また、「自然災害を日本留学の重要な参考基準のひとつである」と回答した者は 29 人 (24.4%) であり、「家族が日本の様々な自然災害を懸念している」と回答した者は 85 人 (71.4%) であった。留學生本人ではなく、家族による地震などの災害への心配は、日本を留学先として選択する影響要素の 1 つであることが窺える。

留学支援について、日中両国の留学支援関連機関に対する留學生の関心と利用状況から述べる。中国の留学支援について

みると、「中国教育部留学サービスセンターによる支援を利用する」、「中国駐日大使館、領事館による支援を利用する」、「公費留学プログラム、奨学金に関する情報を利用する」、「常に中国駐日大使館、領事館による情報を利用する」といった項目について、当てはまると回答した者はそれぞれ 24 人 (20.2%)、20 人 (16.8%)、18 人 (15.1%)、15 人 (12.6%) であり、割合が比較的に低かった。留学生は中国の留学支援については、あまり関心を待っていないことが見られる。日本の留学支援についてみると、「大学事務室による支援を利用する」、「市役所による支援を利用する」、「日本の民間団体が主催する日中友好交流活動に参加する」、「日本政府による支援を理解する」といった項目で、当てはまると回答した者はそれぞれ 50 人 (42.0%)、34 人 (28.6%)、34 人 (28.6%)、33 人 (27.7%) であった。このように、中国国内の留学支援への留学生の関心度は日本国内の留学支援への関心度をわずかに下回っており、大学事務室が提供する様々なサービス情報への関心度が最も高いことが示されている。以上から、留学生は主に大学事務室で掲載されている関連情報に注目しており、他の留学支援関連機関への関心度が低いことが示されている。

留学終了後の計画としては、全体の約 7 割 (69.7%) の留学生は帰国する意向を示したことがわかった。一方、57.1% (68 人) の留学生が「帰国就職の見通しが悪い」と考え、53.8% (64 人) の留学生が「中国国内の就職動向に常に注目する」と回答した。留学生が留学終了後の進路に危機意識を示しており、帰国後の様々な優遇政策が留学生にとって重要な課題になると考えられよう。

### 3. 各影響要素が留学生生活への貢献度

本節では、留学生生活への満足度に対する規定要因を明らかにするため、留学している間の日常生活、心理面、学習・研究状況など諸要素を見落としてはいけない。これらの調査内容に対する回答は、留学生生活への満足度に強く影響を与えると考えられる。そのため、まず、日常生活、学習・研究状況等に関する意識と留学生生活への満足度の相関関係をみてみよう。調査協力者の留学生生活への満足度、日本語能力、各調査内容の平均評定値 ( $M$ )、標準偏差 ( $SD$ )、及びそれぞれの相関関係の結果を表 1 に示す。

表 1 各調査内容の平均評定値、標準偏差及び相関関係

	$M$	$SD$	留学の 動機	日常 生活	心理 面	学習・ 研究状 況	異文化 適応	自然 災害	留学 支援	留学終 了後の 計画	日本語 能力	留学生 生活への 満足度
留学の動機	4.09	0.70	1									
日常生活	3.55	0.84	0.17	1								
心理面	3.14	0.57	0.09	0.55***	1							
学習・研究状況	3.95	0.67	0.09	0.00	-0.16	1						
異文化適応	3.72	0.69	0.19*	-0.46***	-0.40***	0.25**	1					
自然災害	2.81	0.90	0.17	0.30**	0.27**	0.13	0.00	1				
留学支援	2.73	0.82	0.16	-0.32***	-0.28**	0.19*	0.35***	0.13	1			
留学終了後の計画	3.35	0.63	0.15	-0.08	-0.03	0.15	0.48***	0.19*	0.28**	1		
日本語能力	6.03	1.71	0.17	-0.24**	-0.17	0.14	0.15	0.03	-0.06	0.03	1	
留学生生活への満足度	6.65	1.75	0.19*	-0.33***	-0.47***	0.41***	0.47***	-0.05	0.09	0.16	0.39***	1

\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*\*\*  $p < 0.001$

表 1 より、留学生生活への満足度に対し、日常生活、心理面、学習・研究状況、異文化適応、日本語能力の 5 つの要素と有意な相関関係が示されている。また、この 5 つの要素ともに留学生生活への満足度と強く相関が見られる ( $p < 0.001$ )。そのなか、留学生生活への満足度は日常生活、心理面と負の相関であり、学習・研究状況、異文化適応、日本語能力と正の相関である。つまり、留学生は日常生活の負担、心理面のストレスを感じているほど、留学生生活への満足度を低く評価する。学習・研究状況、異文化適応、日本語能力がよいほど、留学生生活への満足度を高く評価する。このことから、日常生活への支援、

学習・研究への指導、心理面へのケア、異文化適応への招待に関する措置が、日本での留学生活に大きく関わる事が明らかとなった。もう1つ注目すべきことは、本調査において留学支援の充実と留学生活への満足度との間に、ほとんど相関が見られなかったことである ( $r=0.09, p>0.05$ )。しかし、周・深田 (2011) では、留学支援の充実が留学生の留学生活に積極的な影響を与えることを指摘している。すなわち、留学支援という積極的な要素は本研究における被調査者のなかで、ほとんど留学生活への満足度に影響を与えていないことがわかった。したがって、留学生の各留学支援機構への関心度の向上への呼びかけことはまだ不十分である。このことはさらに留学生活への満足度を高める方法として重要であろう。

表1で示したように、留学している間の日常生活、学習・研究状況などの諸要素は留学生活への満足度との強く有意な相関関係がある。しかし、留学する前に決めた留学の動機や留学終了後に関する計画にはあまり有意な相関関係が見られなかった。また、本研究では主に留学している間に留学生活への満足度に影響がある要素を焦点に当てる。このことを通して留学生活への満足度を高める方法を提言したい。そのため、留学生活への満足度に対する規定要因を検討する際に、留学している間の日常生活、心理面、学習・研究状況などの諸変数を限定し、変数間の影響を考慮しながら、重回帰分析を用いて検討を行う。

次に、各調査内容が留学生活の満足度への貢献度を調べるために、日常生活、心理面、学習・研究状況、異文化適応、自然災害、留学支援及び日本語能力の7つの要素を説明変数、留学生活への満足度を従属変数として、重回帰分析を行った。その結果(表2を参照)、7つの説明変数から構成した重回帰モデルが留学生活への満足度を有意に説明することができると示された ( $F(7, 111)=14.83, p<0.01$ )。重決定係数が高く ( $R^2=0.477$ )、重回帰モデルの適合度が比較的高く、これらの7つの要素を総合的に考えることが重要であることが明らかとなった。さらに、各要素が留学生活の満足度への貢献度を分析したところ、「心理面のストレス」( $\beta=-0.30, p<0.01$ )、「学習・研究状況」( $\beta=0.29, p<0.001$ )、「異文化適応」( $\beta=0.28, p<0.01$ )、「留学支援」( $\beta=-0.14, p<0.10$ )、「日本語能力」( $\beta=0.24, p<0.01$ )の貢献度が有意であった。また、「心理面のストレス」、「学習・研究状況」、「異文化適応」、「留学支援」と「日本語能力」の順に貢献度が高くなることが分かった。留学生活への満足度には、「学習・研究状況」、「異文化適応」、「日本語能力」と正の影響がある一方で、留学生の「心理面のストレス」、「留学支援」2つの変数が否定的な影響を与えていることが明らかになった。また、これら説明変数なかで、留学生の「心理面のストレス」 $\beta$ の値が最も高かった。つまり、留学生「心理面のストレス」は留学生活への満足度に最も強く否定的な影響を与えている。学生の心理面のストレスが高ければ高いほど、日本での留学生活へ満足度の低下につながるものが考えられる。そのため、留学生の心理面のストレスの緩和が留学生活への満足度を高めることに喫緊の課題となる。

以上を踏まえて、留学生の心理面のストレスの緩和や異文化適応の促進を目指し、留学支援を提供することによって、日本語能力の向上や日本での学習・研究の成果の取得を促し、最終的に日本での留学生活の質を高めることになることが考えられる。

表2 重回帰分析の結果

	変数	$R^2$	$F$	$\beta$	$t$
従属変数	留学満足度	0.477	14.83		
説明変数	日常生活			-0.03	0.30
	心理面のストレス			-0.30	3.43**
	学習・研究状況			0.29	3.91***
	異文化適応			0.28	3.29**
	自然災害			0.01	0.15
	留学支援			-0.14	1.83†
	日本語能力			0.24	3.31**

† $p<0.10$ , \* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$ , \*\*\* $p<0.001$



## 今後の課題

本研究では、広島大学の中国人留学生を対象に、留学生が日本での留学生活の現状実態を調べた。また、留学生活への満足度に関わる影響要素、また各要素間の関係をも検討した。その結果、日本留学の新しい特徴や留学生が直面する問題点を呈示することができた。すなわち、女性留学生の人数の増大傾向や、留学生年齢層の低下する傾向、また修士以上の学位の取得を目指す高いレベルの留学などの特徴が示された。留学生が直面する問題点として、心理面のストレスの深刻化の問題や、留学支援への関心度の低さの問題が挙げられる。本研究の結果を踏まえ、今後の課題として、留学生への具体的な支援政策の考案や、日本全国の留学生と対象とする大規模の調査などをさらに検討する必要がある。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、ご多忙の中、アンケート調査にご協力いただきました皆様にお礼申し上げます。  
なお、本研究は、中国国家留学基金管理委員会（留金发〔2016〕3183）の助成を受け、実施されたものです。

## 注・引用文献

- 日本独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」、2019年、  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2018/\\_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf)（2020年1月12日最終閲覧）。
- 中華人民共和国教育部「中国の留学生の帰国・就職青書2015」、2016年、  
[http://www.moe.edu.cn/jyb\\_xwfb/xw\\_fbh/moe\\_2069/xwfbh\\_2016n/xwfb\\_160325\\_01/160325\\_sfcl01/201603/t20160325\\_235214.html](http://www.moe.edu.cn/jyb_xwfb/xw_fbh/moe_2069/xwfbh_2016n/xwfb_160325_01/160325_sfcl01/201603/t20160325_235214.html)（2020年1月12日最終閲覧）。
- 徐光興・蔭山英順「在日中国人留学生の適応に関する実体と問題」『名古屋大学教育学部紀要（教育心理的学科）』41, 1994年, 39-47頁。
- 毛新華「日本人から見た在日中国人留学生の文化適応の問題点—日本人を対象とする自由記述調査のデータより—」『日本社会心理学会第54回大会発表論文集』, 2013年, 196頁。
- 陳金娣・高田谷久美子「在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果」『山梨大学看護学会誌』6(2), 2008年, 17-24頁。
- 周玉慧・深田博己「在日中国系留学生の心身の健康に及ぼすストレスとサポートの影響：17年間に変化したのか？」『留学生教育』16, 2011年, 1-12頁。
- 費曉東「在日中国留学生学習生活状態：平安留学，健康留学，成功留学対策研究」（報告書），2017年，1-47頁。